On Accent Placement

大　野　純　子

（博士後期課程３年）

1. 始めに

この小論では，sentence stress 又は nucleus という名で呼ばれている accent が，それぞれの文で何故その位置におこるか，その背景，仕組み等について考察する。

Chomsky-Halle の Sound Patterns of English (1968) では，Nuclear Stress は syntax から自動的に予測可能であるという主張がなされた。Chomsky の当時の枠組では，syntactic component の output が，phonological component の input となり，phonological component の output が semantic component の input になる，というように，それぞれの部門は完全に独立しているという考えが前提にあった為，意味的要素が，accent placement に介入する事は不可能であった。Ladd (1978, p. 73) の言う，"semantically neutral accent"，所謂'normal stress'ならば，ある程度まで syntax から導きうるかもしれない。しかし，accent は会話においてその偉力を最も発揮し，会話においてはその話し手に，もっと自由に accent の決定権が委ねられている。Syntax から導き出される accent の位置は一ヵ所だが，実際の会話においては，それ以外の位置に accent が来る場合の方が多いだろう。Accent の全体像は，話し手の意図を無視しては語れない問題なのである。

話し手の意図を考慮に入れて accent を語る時の基本的概念は'focus'である。Focus される要素に accent がくる，誰しもが認める考え方であろう。又，focus という概念を用いて normal stress を話るならば，normal stress とは，どこにも話し手が故意に highlight したいものがない場合の accent の位置，即ち，Ladd (1978, p. 75) の言う focus unspecified の場合の位置であろう。

ただし，focus される要素に accent がくるといっても，そこには依然としていろいろな問題が残されている。

所謂'news sentence'は文全体が focus であるのにいつも主語だけが accent をうける。これは，何か rule があって同じように focus されていてもそうなるのか，それとも主語だけを accent する事の方がより話し手の意図を

反映する事になるからそうなのか。つまり focus されている複数の要素の中からある一つの要素を選び出して accent がつくのには，どのような背景があるだろうか，このような問題にはまだ定まった解答がない。前者の立場，即ち rule が介在していると主張しているのが Gussenhoven (1983, 1985) であり，話し手が直接的にその位置に accent を置いていると主張しているのが，Bolinger (1972, 1985) である。以下に二人の意見を要約し，どちらがより現実に即した説明を行っているのか考えたい。

2. Gussenhoven (1983, 1985) の主張

Gussenhoven (1983) はその第一章で自分の立場を以下のように要約している。

> The purpose of this article … is to identify the formal linguistic options available to speakers that are relevant to nucleus placement, …… we do not pretend to be able to do more than predict the position of nucleus GIVEN A CHOICE FROM SETS OF LINGUISTIC PRIMES. The REASON for the choice is seen as falling outside the scope of the article proper,…… (emphasis in original)

その LINGUISTIC PRIME の中で最初に問題となるのが focus である。

> Focus is seen as a binary variable which obligatory marks all or part of a sentence as [+focus] , i. e. no sentence can be entirely [−focus] .

[±focus] とはそれぞれ以下の意味をもつ。

> …… [+focus] marks the speaker's declared contribution to the conversation, while [−focus] constitutes his cognitive starting point.

これに以下のような rule が働く。

> Accent assignment rules, taking the [+focus] material as their input, assign accent in a purely mechanical way. If there are

more than one [+focus] stretches in a tone group, the assignment rules apply to all these stretches individually……

ここで focus stretches と呼ばれるものは後に focus domain と言いかえられ,

A focus domain can be defined as one or more constituents whose [+focus] status can be signalled by a single accent……

とされる。Gussenhoven の focus の概念で特に銘記しなければならないのは, "that focus marks SEMANTIC material, not syntactic constituents or words."という考え方で, 例えば,

(1) Is this Beverley a bachelor ?

Well, this Beverley is a SPINster. YES.

という問答において focus になっているのは, spinster という言葉全体ではなく [+female] という要素だけであり, それを"minimul focus"と名付け明確にした点にある。

Gussenhoven によれば, 即ち, 文の中で何を [+focus] にするのかは話し手の問題で, 言語学で扱う領域外の事であるが, [+focus] の material が定まれば, そこに accent assignment rule が働いて accent は自動的に決まる, という事になる。何を focus するのか, という点と, focus されている要素の中でどこに accent がくるのか, という問題をはっきり分け, 後者は mechanically に定まるとしているのが彼の考えの特徴であろう。

以下に彼の提唱する rule を実際に考察してみよう。Rule は Sentence Accent Assignment Rule (SAAR) と Polarity Focus Rule (PFR) の二種類が存在する。

2.1 Sentence Accent Assignment Rule

SAAR

(a) Domain assignment : $\underline{P}(X)\underline{A} \rightarrow [P(X)A]$

$\underline{A}(X)\underline{P} \rightarrow [A(X)P]$

$\underline{Y} \rightarrow [Y]$

(b) Accent assignment : [ ] → [*]. In AP/PA, accent A.

A, P, Cとはそれぞれ Argument, Predicate, Condition の事であり, X, Yはこれらのうちどれでもよい。下線部分は [+focus] を表わし, [ ] は domain を示し, * は accent を示す。

実例を用いて考えてみよう。

(2) (a) A P → [Ȧ P] Our dȯg's disappeared.

(b) A C P → [Ȧ] [Ċ] [Ṗ] Our dȯg's mysteriously disappeared

(c) A P C → [Ȧ P] [Ċ] Jȧne's had an accident in Lȯndon.

(d) A P A → [Ȧ] [P Ȧ] Jȯhn beats Mȧry.

(e) A P A → [A Ṗ A] He bȧeats her.

以上の例 (Gussenhoven(34)) を見ると, SAAR は事実関係を正しく記述していない。(d)によれば, A P Aは [Ȧ] と [P Ȧ] に分割されるのであるから, Domain assignment には, 順序があるはずだ。又, (e)から推定されるには, Pの場合にはPに accent がくるのであるから, (b) Accent assignment の条件が間違っている事がわかる。[1] 従って, SAAR は以下のように記述されるべきである。

SAAR (revised)

(a) Domain assignment : 1. P (X) A → [P (X) A]

2. A (X) P → [A (X) P]

3. Y → [Y]

(b) Accent assignment : [ ] → [*]. In AP/PA, accent A.

この SAAR に対して Gussenhoven はふたつの condition を設けている。

まず所謂'news sentence', 従って全体が [+focus] の文においては, Argument が'lexically filled'でなければならず, それに反すると single focus domain が形成されないというものである。'Lexically filled'とは即ち, quantifier, interrogative pronoun, personal pronoun を排除し, 従って

(3) The PRISoners have escaped!

(4) *Everybody has escaped!

(4)の非文性が説明される。

次も又'news sentence'に対するconditionだが，single focus domainを形成する為には，その文が[+eventive]でなければならない，というものがある。[−Eventive] とは具体的には'contingency sentence'と'definitional sentence'の二例をさす。

Contingencyは以下の例で示される。

(5) DOGS must be carried.

(6) *Dogs must be CARRied.

ロンドンで地下鉄にのった人が，実際は(6)の意味で書かれたものを(5)のように解釈し心配したという。(5)は「犬をつれて乗って下さい」という意味だが，(6)は「犬をつれていたならば抱いて下さい」という意味である。このように「……が存在するならば」という条件がつくものがcontingencyで [−eventive] であり，例えnews sentenceであってもsingle focus domainを形成せず，accentはAとPの両方につく。

Definitionalは以下の例で示される。

(7) The MILK's in the sun.

(8) Milk is ANimal.

(7)は具体的なミルクについての陳述だが，(8)は一般的なミルクについて定義を述べている。このように定義している文がdefinitionalで[−eventive]でありcontingencyの文と同様，accentはPにもくる。

以上みてきたように，"For an Argument and a Predicate to be able to form a single focus domain, the Argument must be lexically filled and the sentence must be eventive,"という条件がSAARのdomain assignmentには必要である。

2.2 Some Refinements

Predicate や Condition の status に関し，いくつかの提言を Gussenhoven は行っている。以下にそれを要約する。

まず single-verb paraphrase が可能なもの，又，他の言語に single-word equivalent が存在するものは１つのＰとみなすというものである。
従って (2.c) の have an accident は verongelukken という単語がオランダ語に存在し，１つのＰとみなされる。

次に'adverbs of proper functioning'はＰに含まれるという提言をなす。

(9) A : What are you using my PEN for?
B : Because it WRITES well.

(10) B : Because it wr*ites/be*autifully.

(9)の well は adverbs of proper functioning なので accent をうけない。

Adjectival object complement は，その直前のＡが accent をうける時には accent されず，即ちＰの一部と考えられる。しかしＰの中では verb ではなく object complement が accent をうける。従って

(11) He <u>left the DOOR open.</u>[2]

(12) A : (slams door)
B : I wish you'd <u>left</u> the door <u>OPEN.</u>

となる。

又，destination adjunct は verb of motion と融合して１つのＰになるが duration adjunct は融合せず，各々独立の domain をなす。

Focus domain の背景には，cultural (pragmatical)な要素もかかわりがあると，Gussenhoven は主張し，オランド語と比較しながらそれを説明する。

(13) A : Is your husband in?
B : He's gone fishing with his SON.
Hij is met zijn zoontje VISSen.

(14) A : Is your husband in?
B : He's out playing with his SON.
Hij is met zijn ZOONtje aan't spelen.

Gone fishing と with his son は英語でもオランダ語でも separate domain だが, out playing with his SON はオランダ語では single domain で, それはオランダの cultural normalcy を反映していると主張している。

2.3 Polarity Focus Rule

A, P, C というように SAAR で用いられた単位より小さい要素のみが focus されている場合が minimal focus であるが, その中の代表的な例, polarity focus に対し, Gussenhoven は英語とオランダ語のルールをそれぞれ設けている。

Polarity Focus Rule : English

(a) $\overset{*}{\text{NC}}$(X) [−counterassertive]

(b) $\overset{*}{\text{operator}}$ [+counterassertive]

Condition : if S is negative, X does not contain an NC

Polarily Focus Rule : Dutch

(a) $\left.\begin{array}{l}\overset{*}{\text{COMP}}\text{, if } \bar{\text{S}} \\ \overset{*}{\text{operator}}\end{array}\right\}$ [−counterassertive]

(b) $\overset{*}{\text{polarity}}$ morpheme [+counterassertive]

where $\bar{\text{S}}$ stands for 'embedded sentence.'

NC とは'nucleus carrier'の事で, 具体的には,

(i) the penultimate verb-phrase element (modal auxiliary, grammatical auxiliary, lexical item), unless there is only one item, in which case that is the NC.

(ii) prepositions

(iii) the verbal <u>to</u>-particle

の三種を含む。これらの要素の特徴として, Gussenhoven は'conspicuous for their semantic emptiness'と述べている。

Polarity focus のように，英語とオランダ語で常に accent される要素が異なるという事実が，Gussenhoven が accent placement をルールでとらえようとしている根拠の一つである。もう一つの根拠として intonation のルールが syntax のルールの前提となっている例を，Gussenhoven はあげている。それが Intonational Topicalization である。

(15) HIM I hate.

このような文には対応する

(16) I hate HIM.

という sentence があり，him が前置されているのだと Gussenhoven は考える。

以上が Gussenhoven (1983) の要旨である。文中の [+focus] の要素の中からルールによって accent は導きだされると考え，SAAR と PFR を提唱し，具体的な数多くの例でそれを示しているのである。

3. Gussenhoven に対する反論

次に Gussenhoven の主張の信憑性を Bolinger (1985) 等を参考にし考察したい。

SAAR に関してはその式が言わんとする所を汲んで，Gussenhoven 自身の例をよりよく捉えられるように revise した。(p. 6)　これは彼の主張に添ったものであるが，以下においては彼の主張そのものに疑問を投じたい。

SAAR では，A と P がそれぞれ focus されていて 1 つの domain を形成するならば，A に accent がくると主張している。しかし，Bolinger (1985) の例でみられるように，それは必ずしも正しくない。

(17) What is Mr. Arnold doing?

(a) Caning a STUdent, I guess.

(b) CANing some student or other, I guess.

(18) He's comfortable now because he BOUGHT a place.

(19) Life is HARD.

又，Aが accent される為の condition として'must be lexically filled'と述べ，quantifier, interrogative pronoun, personal pronoun を排徐している。これも事実関係を正しくとらえていない。

(20) EVerybody has escaped.

Gussenhoven はこれを非文としているが，もし看獄での会話ならば別に構わないだろう。

(21) WHO's gonna care?

これは interrogative pronoun に対する反例であり，

(22) Going to Nice for your vacation?—What!
YOU came to grief there, have you forgótten?

(22)は，personal pronoun に対する反例である。

Bolinger は(17)のような例を数多く出し[3]pronoun であるかどうかが問題なのではなく indefiniteness がAに対する制約として関わりがあると主張する。しかしこの主張も，Gussenhoven (1985) によると the poor soul, the wretch 等が誤って排徐されてしまうので正しく事実関係を捉えていない事になる。

Bolinger は life, time 等'UBIQUITY'という性質をもつAも一般に accent はうけないと主張する (c. f. our(19)). Pronounness や indefiniteness というような generalization で表わそうとしたもの（どちらも正確な constraint 足りえないが)，又，ubiquity という性質をもつもの，これらを総合して考えてみると，「話し手が特に重要視して考えないAには accent がつかない」という事になるであろう。Pronoun であっても話し手がそれを強調したい場合には accent がつく。又，life, time 等，常に私達の回りにあるものは，一般に話し手は，それを強調して話すのではなく，それを修飾する何かを強調して話す場合が多く，'taken for granted'のメッセージとなりやすい。それ故 accent はつかない。結局，A全体をとらえる的確な consraint を define するのは困難であり，〝情報としてあまり重要でないと話

し手が考えるAには accent はつかない″という曖昧な事しか主張しえないであろう。AとPが single focus domain を形成するならばAにいつも accent がくるとは限らないし，又，'must be lexically filled'という condition には余りにも例外が多い。「AとPが single focus domain を形成し，尚且つ，AもPも話し手にとって同じ位重要な要素ならばAの方に accent がくる」とは言えるであろう。

AとPが single focus domain を形成する為のもう一つの条件は［+eventive］という事であった。Eventive とは contingency sentences や definitional sentences を排徐する為に設けられた条件であるが，この主張は大筋において正しい。Bolinger は eventive に対しては，accident, definitional に対しては essence という用語を用いた方がより適切と述べているが，この際用語の問題はあまり重要ではない。

Bolinger は，definitional に対する反例として (157)～(159) の例文をあげているが，これらは適切な例文でない。凡て，他から情報を得て，その定義を繰り返して述べているにすぎず，Gussenhoven の意図する definitional sentences，つまりAの定義をしている文というのからははずれていると思う。

次に，2.2で扱った問題について考えてみたい。Gussenhoven は refinements と称して，Pに含まれ，独立した focus domain をなさない要素というものを細かくとりあげている。例えば，adverbs of proper functioning は，accent がつかないと主張しているが，

(23) How come you're wearing THAT dress?

(a) Because it LOOKS right on me.

(b) Because it looks RIGHT on me.

は，どちらも可能である。又，(10) (11)と同様に

(24) I wish you'd LEFT the door open.

という場合もあるだろう。

Destination-adjunct と duration adjunct の status の相違を説明する為に

Gussenhoven はオランダ語をひきあいに出しているが，これは危険な事であろう。第一に，英語の例だけを見ると accent に違いはない。第二に，オランダ語においては accent は異るが，単語の意味・ニュアンスの違いからそうなっているかもしれないという可能性を否定しきれないからである。そこから英語に対する主張を導き出すのは危険な事だと思う。

同様にこのような微妙な問題で cultural normalcy 云々するのは飛躍しすぎと思う。語の選択等の問題も accent に影響を与えているかもしれないからである。

一般に2.2でとりあげているのは，どれも些細な問題で，何か「主張をなす」程の根拠になりえるものはないと思う。話し手の意図を反映して accent は微妙に変化しうるのである。

SAAR によると所謂'news sentence'でも，AとPの間にCが介入すると，それぞれの要素，凡べてに accent がつく。(cf p. 7 (2) a. b) Bolinger は，彼の (195) の例でこの事実が必ずしも正しくない事を示しているが，私がここで問題にしたいのは focus domain と accent の関係である。[+Focus]の要素の中からある要素が選び出されて，accent がつくというのは概ね賛成出来る考え方である。しかし，accent の変化は focus domain の変化によるものであるという考え方には必ずしも賛成できない。(c.f. Gussenhoven p. 402)

(25) A：I went to see the movie 'Back to the FUTURE', yesterday.

B：What?

(25)のような状況で，Bに対する返答に，Aが同じ文章をくりかえすならば，大抵，accent を変化させて言うだろう。これは focus が異なる，というような説明でとらえられる問題ではない。Accent に変化をもたせる事によって，相手の注意をひく事を意図しているのであり，focus には変化はない。それなのにわざわざ別な focus domain を与えて文を区切ってしまうのは，話し手の意図を正しく反映しない事になる。ある sentence の一部，乃至全体を[+focus] とするというのは納得がいくが，それを accent に従って focus domain に区切る必要はない。Accent は，その時，その時の話し手の気持ち

に従って，focusされているものの中からある要素が選び出されてつくものだからである。Sentence stressと呼ばれている最後のaccent以外のaccentが，focusされている別の要素につく事もある。Domainで区切ってaccentを1対1で対応させると，accentの強さの違いで表わされる微妙な話し手の気持ちの違い，といった事柄は一際説明がつかない。(4)

SAARに対する議論はここでひとまず終りにして，次にPFRについて述べる。

オランダ語に関してはよくわからないが，英語のPFRはルールとしてとりあげなければならない程一般的現象なのか，まず疑問に思う。Bolingerが出している以下の例で考えてみよう。

(26) A：Why do you refuse to call him Abernathy?

(a) I don't beLIEVE his name to be Abernathy.

(b) I don't believe his NAME to be Abernathy.

(c) I don't believe his name TO be Abernathy.

(d) I don't believe his name to BE Abernathy.

(e) I don't believe his name to be ABernathy.

(f) I don't believe his name to be AberNATHy.

(g) I don't beLIEVE his name TO be Abernathy.

(h) I don't beLIEVE his NAME to be AberNATHy.

Aの問いに対する答えとしては，少なくとも(a)～(h)の8通りがある。これ以外にも，relative pronoun, relative adverb, adjective, article等，どんな要素も実際にはaccentをうける事が可能であるとBolingerは言う。どんな要素にもaccentがつく可能性があるのならば，それをルールで限定するのは，無理な事であろう。Gussenhoven自身，Bolingerの批判に対する答として出した論文（1985）で，'While I grant that my treatment of "minimal focus" may have unduly concentrated on what is different at the expense of what is the same……,'と述べているように，PFRは例外が多すぎる。

又, Gussenhoven は, NC の特徴として, 'conspicuous for their semantic emptiness' と言っているが,

(27) (a) Would you refrain from buying it if you were really eager TO buy it?

(b) ?Wouldn't you refrain from buying it if you were really reluctant TO buy it?

(28) (a) Why do you speak up now?—— Because it's the right time TO speak up!

(b) Why don't you speak up now?——?Because it's the wrong time TO speak up!

以上の Bolinger の例で示されるように, to に 'towardness' のような意味合いが含まれている時には acceptable な文も, to がそのような意味をもたない時は ? になり, acceptability はさがる。即ち, to に accent がくる場合は, to にも何らかの意味がある場合に限られているのであり, 'semantic emptiness' といった表現は適当ではない。[5]

Gussenhoven は, syntax の topicalization の起こる前には intonational topicalization が存在するとして, それを accent をルールでとらえた方がよいとする根拠の一つとしているが,

(29) Why is it that you're so willing to do business with Mary but not With me?
Mary I can TRUST.

という Bolinger の例からも判るように, そのような前提は存在しない。これに対する反論として, Gussenhoven は,

(30) John died a bachelor. Mind you, in the village he lived in he only had Sue and Sally Baker to choose from and them he wouldn't look TWICE at.

の them は必ず/ðem/と発音される事をあげている。しかし, この例は accent の例としてはあまり適切ではないと思う。この例が示しているのは,

文頭（この場合は節の初め）では発音の弱形は用いられないという事であるから。

以上見てきたように，Gussenhoven の提唱しているルール，SAAR, PFR，そして intonational topicalization はそれぞれどれにも問題がある。

4. Bolinger の主張

Accent placement をルールでとらえようとする Gussenhoven の主張には，多々不備な点が見い出された。次に accent は，話し手の気持ち次第であるという Bolinger の考えを見てみよう。

Bolinger は1972年及び1985年の二つの論文で自身の主張を述べているが，どちらも他人に対する反論と自分の意見が織り混ざって書かれている。以下では彼自身の意見の部分を取り上げ，それを整理し，より明確になる様に試みる。

1972年の論文は，"Accented words are points of information focus." "The distribution of sentence accents is not determined by syntactic structure but by semantic and emotional highlighting"という表現で表わされているように，言葉の意味の重要性から accent は決定するという立場をとっていた。1985年の論文ではその上，accent のもつ POWER という側面も関連があると Bolinger は指摘する。

> Power encourages the wide choice of locations for the accent — climactic toward the end, anticlimactic toward the beginning, and extra-climactic when two or more elements are accented at the same time.

Accent のもつ POWER という discourse strategy がより強力に発揮されるのが，'distortion'である。以下の例で考えてみよう。

(31) You've overlooked the possibility of dealing with him personally.
Not at all. That was never really a POSsibility.

Normal stress を distort する事により contrast を明確にし，extra boosting という効果を生むのである。

又, INFORMATION という用語よりももっと包括的用語 INTEREST を好んで使い，INFORMATION は INTEREST の下位範疇とする。

> My position is that accents are prima facie iconic, responding to the speaker's sensation of INTEREST in what he is saying plus a general desire to impress. At a first remove from interest we have IMPORTANCE—what is most important is what is apt to be most interesting; and at a second remove we have INFORMATION — what is most informative is apt to be what is most important. Information structure is served by accentual structure, but mediated through sensation.

このような'most important'という考え方から必然的に'less important' 'least important'という要素が出てくる。従って，accent は，accented, not accented の二次元なとらえ方ではなく，話し手のいろいろな sensation を反映して，いろいろな強さの段階があるとみる。

所謂，'news sentence'で，最初の要素Aにだけ accent がくるのは，それが EMBLEM として働く為だと云う。

> One element is selected as EMBLEMATIC of the whole event, the rest — however important in their own right in the real world—becoming relatively subsidiary.
>
> We favour Arguments……because nouns generally encode the most specific and most readily emblematic information.

又，UBIQUITY という用語であらわされるものは'Background'として一般に受けいれられてしまっているものなので，必ずしも accent を受ける必要がないと主張する。

ある要素が accent を受けない理由には，economy も関連があるという。

> In a conversation consisting of a rapid interchange of a relatively high number of utterances, sometimes two or more being produced in succession by a single speaker, the amount of effective highlighting is limited, both as regards perception and as regards short-term memory involved in processing.

以上見てきたように，Bolinger は accent の pragmatic な側面もとりいれて考察をしている。話し手の sensation を反映して，POWER と INTEREST が総合的に働き合い，実際の accent として具現化される。話し手が focus する部分の中に，より focus したいものがあるならば，それを反映して accent も強さに段階があるとする。

以上が Bolinger の主張の要約である。これを批判するのは難しい問題である。何かルールのようなものがあれば，その反例等を捜して意見を述べる事も出来ようが，話し手の sensation が決め手というのは，具体的に証明する事も反証する事も不可能だからである。

5. 結　語

今まで考察してきたように，Gussenhoven の提唱しているルールは正しく事実関係をとらえているとは言い難い。とくに，PFR はルールとして取り上げる程の一般的現象ではない。SAAR は，accent と focus domain をあまりに厳密に一対一の関係とした為，[+focus] の部分を accent に応じて不必要に区切らねばならず，人為的操作になっていると思う。又，accent にはいろいろな段階があるという事実も無視されている。ただ，Argument と Predicate では Argument に accent がきやすい事をルールとして表わそうとした事，news sentence を eventive という新しい観点から捉えた事，minimal focus の概念を明らかにした事等，評価される点も多い。良い着眼点はいろいろあったのだが，それをルール化する事にこだわりすぎたようだ。

一方 Bolinger であるが，彼の主張は true or false で判断出来る性質のものではなく，科学的陳述とは云い難い。POWER, EMBLEM 等興味ある説明をおこなっているが，英語を second language として学ぶ者としては，accent は speaker's sensation に依り決定する，というのは何とも判断しようのない意見である。Accent というものが，実際に話し手次第で如何様にも変化しうるものだとしても，native speaker でない者の為には何か一般的法則があった方がよい。又，ルールをたてると例外も見つかり，そのルールで扱いきれない範囲が明らかになる等，新しい言語事実の発見を促しやすい。始めから，speaker's sensation というのでは，どのような例も説明の仕方しだいで含まれてしまい，いろいろな例の共通性，非共通性がまとめられない。危険性を承知で敢えて，ルールを提唱するのは必要な試みだと思う。

興味深いのは，Gussenhoven も Bolinger もルールをたてた方が良いかどうかの判断の根拠の一つとして，Chomsky の主張した"simplicity measure"を採用している点である。Gussenhoven は

> The force of the argument here rests on the undesirability of the resultant duplication in the description: if the syntactic surface form is derived from those options, it would be uneconomical not to use them to generate the prosodic surface form as well.

と述べている事から判るように，economical 即ち simple な方が好ましいと考えている。一方 Bolinger も"…… the main disadvantage of Gussenhoven's position is that it requires two explanations for a single form"と批判している事から判るように，これも又 simple なものが良いと考えている。だが，大切なのは事実の正しい把握と納得のいく説明である。Simple かどうかというのは単に形式的な問題にすぎず，しばしば事実の正しい把握を損ってしまう。

Gussenhoven がルールを導入する根拠としてあげている説明には，オランダ語と英語の比較に基づいているものが多い。しかし，オランダ語と比較して英語について語るのは望ましい姿勢とは思わない。繰り返しになるが，対

応していると思われる語でも，全く意味が同じかどうか判断が難しいからである。

次に"news sentence"についてである。Emblem に依る説明では，full focus sentence と Argument だけが focus されている sentence の心理的想違に説明がないと Gussenhoven は批判する。しかし focused elements の中から Argument を accent する要素として選び出したと考えれば問題はない。又，もっと長い full focus sentence を考察の対象とすれば，話し手が大切に思う要素に自由に accent をつける事が判るであろう。

Gussenhoven は，

(31) Where's your PURSE?
My pŕurse has GONE.

においては，optional な pre-nuclear accent を導入すれば良いと言うが，代名詞化しなかった事に話し手が何か意味をもち，その為に，pre-nucldar accent がつくと考えた方がより適切であろう。

以上考察してきた事を鑑みて，私なりのまとめをしよう。

(1) Accent は focused element につく。
(2) Argument と Predicate が同程度に重要ならば Argument に accent はつく。
(3) 話し手は contrast を明らかにする為に accent をかなり自由に変化させる事が出来る。

以上の 3 点では，あまりに曖昧なまとめであるが，現時点では accent plancement に関し，これ程度の事しか主張出来ないのが実状であろう。

Gussenhoven のルールそのものは，あまり適当ではなかったが，試みとしては評価したい。Bolinger の説明はあまりに包括的で，凡てそれで説明出来るとしても，英語の学習者の助けにはならない。何か方向性のようなものは示すべきだと思う。

Notes :

(1) (d)では，have an accident が一つのPとみなされている。これについては，後で（p. 8）触れる事にする。

(2) 下線部分は［+focus］を示す。

(3) Bolinger は，partitive も indefiniteness の例としてあげているが，彼の(71)～(73)で用いられている partitives の例は凡べて先行する文のAの言いかえで，即ち［−focus］であり，当然 accent を受けない。

(4) Bolinger は，accent の'power'と'hierarchy of graded accents'という用語で同じような意味あいの事を述べている。

(5) Bolinger は，p. 83で NC を paraphrase して NC にも意味がある事を示そうとしている。筆者は，accent は微妙な問題なので，英語とオランダ語を比較するのはあまり好ましくないと述べたのと同様，paraphrase された文と元の文を比較するのも好ましくないと考える。paraphrase した場合に，単語が一対一で対応しているという保証がないからである。

References :

Bolinger, D. (1972), "Accent is predictable (if you're a mind-reader)." Lg 48, 633-644.

Bolinger, D. (1985), "Two views of accent" J. Linguistics 21, 79-123.

Chomsky, N., and Halle, M. (1968). The Sound Pattern of English, New York : Harper & Row

Gussenhoven, C. (1983). "Focus, mode and the nucleus" J. Linguistics 19, 377-411.

Gussenhoven, C. (1985). "Two views of accent : a reply" J. Linguistics 21, 125-138.

Ladd, D. R. (1980). The structure of intonational of meaning : evidence from English. Bloomington : Indiana University Press.